



TITLE:

信用と資本

AUTHOR(S):

中谷, 實

---

CITATION:

中谷, 實. 信用と資本. 經濟論叢 1931, 32(5): 830-845

ISSUE DATE:

1931-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130029>

RIGHT:

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十二卷 第五號

昭和六年五月一日發行

## 論叢

人稅物稅の分界並に特徵……………法學博士 神戸正雄  
人口密度と經濟生活……………經濟學博士 沙見三郎  
數學的經濟學の論理的構造の批判……………文學博士 米田庄太郎

## 說苑

米の生産地と消費地との對立……………經濟學士 谷口吉彦  
信用と資本……………經濟學士 中谷實  
國勢調査に於ける人口の概念……………經濟學士 岡崎文規

## 雜錄

都市公企業の財政的意味……………經濟學士 大谷政敬  
植民的活動に於ける政治的支配に就いて……………經濟學士 金持一郎  
歷史哲學に就いて……………經濟學士 竹中靖一  
ルドウエル『綜合經濟學』概念……………經濟學士 桑原晋

## 法令

地租法・營業收益稅法中改正法律・砂糖消費稅法中改正法律・織物消費稅法中改正法律

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

## 信用と資本

中 谷 實

## 一、序 言

信用と資本との關係は信用理論の中心問題をなすものである。蓋し、近世の初期以來飛躍的發展を示せる現實の經濟社會を見て、或者は之を過去の蓄積資本に歸するに反し、他の者はその資本増殖の原因を、時を同うして勃興せし信用活動に求めんとし、未だ其の何れが是なるかを定め難き事情が存する故である。

今此の問題に關する思想の經過を顧みるに、近世初期に於ては、繼起せる機械の發明に加ふるに新大陸の發見あり、或は新企業の勃興により又は新大陸より富を歐洲に入れる爲め、現實に資本の逼迫利子騰貴の現象が起り、之より「信用増加は資本創造力を有す」との思想が行はれたのである。當時諸國に於て盛んに銀行券の發行せられたるは、全く此の思想に基くものにして、之によりて、資本の逼迫利子騰貴の現象を緩和せんとするものに他ならない。

然るにリカルド一度出でて貨幣數量説の信奉されるに至るや、信用の資本創造力は全然否定せられ、貨幣(信用)の増加は單に物價を騰貴せしむる力を有するのみと考へられるに至つた。即ち、

- 1) 資本の意義を通説に従ひ、「生産されたる生産手段」の意に解する。高田保馬博士、經濟學新講第一卷：一六四頁。
- 2) Albert Hahn: Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits. 3 Aufl. 1930 S. 127

貨幣をつくる „Geld machen” と云ふ事は、決して財貨をつくる „Güter machen” 事ではあり得ない、と云ふ考に基くのである。

勿論信用そのものが、中間生産物たる意味に於ける、資本を創造し得るものなりとは決して言ひ得ない。従つて其の限りに於ては、數量說的考へ方は、それ以前の考に比して、より論理的なるものと言ひ得るであらう。只經驗上の事實に徴する時は、信用増加が資本の形成に全然無關係なりとは到底言ひ得ないのであつて、茲に、近時の思想が相反する二つの方向に趨る所以が存するのである。

其の一は、マクラウド及びハーン等の如き實際家によりて主張されるものにして、信用の資本創造力を認め、他はのもの之を認めずして、寧ろ資本創造力の源泉を節約に求めんとするものである。<sup>4)</sup>而して通説は後者に屬する故、先づ前者の代表的著作たるハーンの説を述べ、次で之が批評を吟味する事とする。

## 二、信用が資本に及ぼす影響に關するハーンの説

フランクフルトの銀行家アルバート・ハーンは、世の學者が今尙多く數量說的見解に捉はれて、信用の資本創造力を否定するに反し、其の體驗より、此の資本創造力を強く主張せんとするのである。即ち「資本の形成は、貯蓄の結果でなくして信用授與の結果であり、信用授與は、資本形成に對して第一次的である。」<sup>6)</sup>と。之即ち彼の言はんとする最後の目的である。

3) Macleod, Hahn. (K. Diehl; Über neuere Kredittheorien im Lichte der Lehre von Macleod) im Kölner Vorträge: Die Kreditwirtschaft 1. Teil S. 152

4) Hahn: a. a. O. SS. 127-129

5) Hahn: 2 Aufl. 1924. 同抄譯, 大北文次郎氏: 「ハーンの銀行信用理論」(商學論集第一卷)及び 3 Aufl. 1930

然らば彼は如何にして此の主張を證明したか。今彼の採りし推論を要約すれば次の如く言ひ得るであらう。

資本——即ち中間生産物の意味に於ける——は、明かに一般財貨の一部分であり、従つて資本生産の活動は、財貨生産の活動の一部に他ならぬ。然るに信用許與は購買力の許與を意味し、従つて、信用を受けし企業者は生産手段（勞働力をも含めて）に對して需要を發する。

他方、需要は生産に對して第一次的である。故に信用許與も亦資本形成に對して第一次的である、と。

斯くて彼は、信用増加が、財貨の増加従つて資本の増加を齎らすものなりと主張するのであるが、茲に尙一つのデイレンマが残つてゐる。即ち右の前提は、明かに、生産のみが財貨の増加を齎らし得るものなりとの假定を含み居るにも拘はらず、理論上、信用許與は決して生産ではあり得ないのである。

茲に於て彼は、財貨増加——従つて資本増加——の原因として、分配關係の變化なる概念を持來り、信用擴張による需要の變化が、分配關係を變化する事によりて、生産の増加を生ずるものなりと論じてゐる。<sup>6)</sup>

右が即ちハーンに於ける推論の概要であるが、以下少しく詳細に彼の述ぶる所を窺ふであらう。先づ彼は、國民經濟に於ける財貨の量を流れの水量に比し、以て、信用擴張が財貨の流れに及ぼす影響を述べてゐる。即ち、個々の水の小部分が水源に於て流れの水量に加はり、一定時間の經過

6) a. a. O. 2. Aufl. S. 210

7) a. a. O. SS. 210-211

8) 此の點は彼の著書、第二版(1924)に於ても述べられ居るが(Hahn: 2. Aufl. S. 137 以下) 第三版(1930)に於ては一層明確に主張せられてゐる。(a. a. O. 3. Aufl. SS. 124-6. S. 130)

後、河口に於て再び河床から消滅する如く、財貨は、生産の開始と共に財貨存在量の成分となり、消費を経て、然る後完全に財貨の世界から消滅するのである。<sup>9)</sup>又個々の水の小部分が、水源より河口に至る間に要する時間が全く異り居るが如く、個々の財貨が、國民經濟に存在する時の長さも亦異つてゐるのである。斯くて、短かき財貨の流れは、生産の開始と消費の終了との間に極僅かの時間が存するに過ぎざる財貨、即ち狹義の消費財(或は低順位の財貨 *Güter niedrigerer Ordnung*)より成るを原則とし、長き財貨の流れは、生産の開始と消費の終了との間に長き時間の存する財貨、即ち資本財(又は高順位の財貨 <sup>10)</sup>*Güter höherer Ordnung*)より成るを普通とする。只居住家屋の如き持續財 *Dauergüter* は、其の性質よりせば消費財なるにも拘はらず、其の存續期間が長き故、最も長き財貨の流れに數へられてゐる。<sup>11)</sup>

而も彼によれば、かゝる財貨の流れの床へ國民の勞働が注ぐのであつて、此の勞働こそ、各種財貨の最後の生産要素であり、従つてあらゆる財貨の流れの源泉をなしてゐる。<sup>12)</sup>

今此の前提の下に於て、信用許與が財貨の生産——即ち勞働の方面——に如何なる作用を及ぼすか。彼は「如何なる物が生産されるか」、及び「如何に生産されるか」の兩者に付て説明を與へてゐる。先づ如何なる財貨が生産されるかは、個々の財貨が高低諸種の價格に於て如何なる範圍に需要せられ得るか、又此の價格に於て需要が如何なる範圍に迄滿されるか、に依存するものなれど、更に信用許與によりて重大なる影響を受けるものである。今信用の無償を前提すれば、買手に於て、苟しくも、其の生産に適用されたる勞働に對する費用、を償ふが如き價格を支拂はんとするもの

9) Hahn: 2 Aufl. S. 112. 3 Aufl. S. 109

10) 高順位の財貨とは、財貨が其自身消費に役立つものでなく、之より生産されたる生産物になつて消費に役立つもの、即ち機械工場設備等を指す。

11) Hahn: 2 Aufl. S. 123. 3 Aufl. S. 110

は、總て生産せられるであらう。然るに信用が無償でなく、利子を附せられる場合に於ては、買手が、賃銀のみならず利子の爲めの費用をも、補償せんとするが如き財貨のみが生産せられ得る事となる。斯くて、企業者が銀行信用のみによりて生産を爲すとの假定に立つ以上、持續財の如く、生産の開始より消費の終了に至る迄に久しき期間を要する財貨は、信用利率の高ければ高き程其の生産高は少く、亦その財貨の流れが長ければ長き程少き事となる。<sup>12)</sup>

次に、信用は財貨の生産方法に如何なる影響を及ぼすか、彼が例によりて説明せる所は次の如くである。

即ち先づ、百萬足の長靴を製造するとして、此の場合、其の製造が一萬人の労働者により一ケ年間手工業的に行はるる事も出来れば、或は又、第一年には五千人の労働者によりて長靴製造機械を製作し、第二年に於て此の機械を用ひて長靴自體を製造せしむる事も出来るのである。而して兩者の場合に於て、共に百萬足の長靴が生産せられ、共に勞賃合計一萬人一ケ年分だけの費用を要してゐる。只異なるは、第二の場合に於ては、長靴の生産は第二年の後に遅れるも、實は、技術的理由よりして、其の生産高は百萬足に止まらず、遙かに之を凌駕するを常とする事である。故に若し、信用無償の前提が置かれるならば、後の生産方法は、前者の方法に比して遙かに有利なりと言はねばならない。之即ち、ボエーム・バヴェルクの所謂生産の迂路 Produktionsumweg にして、總ての企業者が此の方法を執るに至るは勿論である。然るに若し、信用が無償でなく、之に利子を附せらるる場合に於ては、生産迂路によりて得らるる利益が、より長き生産期間に對する利

12) a. a. O. S. III

13) a. a. O. 2 Aufl. SS. 124-125 3 Aufl. S. 116 には持續財なる言葉の代りに「最長の生産迂路をなす生産」なる言葉が用ひられてゐる。

子費用よりも大なる場合にのみ、此の方法が用ひられる。

即ち信用は、國民經濟に於ける生産方法にも重大なる影響を及ぼすものにして、より以上の生産迂路の能否は、實に利率の高低に依存するものと言はねばならない。

要するに、利子低下の爲に収益性の生じたる企業は、興へられたる新購買力を以て、原料又は中間生産物に需要を發するとする。然る時は、之等の財貨の價格騰貴に刺戟されて、其の生産者は、次の生産期に於て生産擴張をなすであらう。此の際必要な勞働力は、他の――消費財生産の――産業部門より誘致するものにして、之によりて彼等は、新企業に、原料及び中間生産物を供給する事が出来るのである。<sup>15)</sup>斯くて、生産迂路による財貨生産及び持續財の生産は一層盛となり、國民の勞働は、短かき財貨の流れの河床より、長き財貨の流れの河床に轉向せしめらるる事となる。之即ち、財貨構成に於て、資本の占むる割合の増加する所以に外ならない。

以上述ぶるが如く、信用擴張は財貨の構成に變化を齎らすものなるが、ハーンによれば、之が亦同時に財貨總量の絶對的な増加を生ずるのである。即ち、信用擴張によりて惹起されたる財貨需要の増加は、事實上財貨生産の絶對的増加、而も原則として總ての生産全體の増加を起すのである。<sup>16)</sup>

然らば如何にして此の事が可能とせられるか、他方に於ては、信用擴張の財貨増加力を明かに否定する論者多きに拘はらず、ハーンは何に據りて此の事を強く主張せんとするか。彼の言ふ所に従へば、純理論は近代經濟の實情より論を立つる事をなさずして、今尙、クラシカー Klassiker

14) a. a. O. SS. 125-128 3 Aufl. SS. 112-113

15) a. a. O. 2 Aufl. SS. 128-129

16) a. a. O. 2 Aufl. S. 135, 3 Aufl. S. 113, 115, 121



が著作の基礎となせし經濟狀態より概念を立つるに反し、彼自らは、嚴に近代經濟の事實的狀態に、其の概念構成の基礎を求むるが故である。<sup>17)</sup>

即ちクラシカーの見たる社會に於ては、生産技術未だ幼稚にして、財貨に對する増加需要は、勞働力がそれに相應じて増加せる場合にのみ充され得たのである。然るに當時に於ては、諸國民の有する生産手段も未だ乏しく、之に應じて、勞働力も通常餘力を残さざりし故、信用擴張による財貨増加と云ふが如き事は、問題となり得なかつたのである。<sup>18)</sup>

然し乍ら、ハーンの見たる近代經濟に於ては事態は全く異り來る。即ち、近代の經濟社會に於ては、生産の技術が驚く可き發達を遂げ、而も機械を用ふるの程度が増せし結果、財貨に對する需要増加は、必ずしもそれに應ずる勞働力の増加を必要とせず、遙かに少き増加を以て充分とするのである。加之、近代社會に於ては、巨大なる勞働豫備軍が存在し、生産増加に必要な比較的僅少の増加勞働は、右の豫備軍より容易に之を得られるのである。此の技術の進歩と勞働豫備軍の存在、即ち所謂近代經濟に於ける弾力性の存する結果、信用擴張は財貨生産の絶對的增加を齎らし得るのである。<sup>19)</sup>而も新勞働が生産に用ひられるに至るは、利子引下によりて擴張を促されたる企業の競争の爲め、賃銀が騰貴し始めし結果に他ならない。

斯くて、信用擴張の結果、國民經濟に於てより多數の人間が勞働に従事する事となり、而も物價騰貴に基く定額收入階級(利子年金生活者、資本家及び定額俸給受領者)の實所得の減少の爲め、茲に分配關係に變化を生じ、生産に従事する人々の社會生産物に對する分前は、従前よりも多き

17) a. a. O. 2 Aufl. S. 134 3 Aufl. S. 120, 121

18) a. a. O. 2 Aufl. S. 134, 135, 3 Aufl. S. 120, 121

19) a. a. O.

事となる。<sup>20)</sup>

故にハーンはその結論に於て、信用増加は、財貨分配の變化を通じて、財貨の増加を生ぜしむ、<sup>21)</sup>と言つてゐるのである。

以上が即ち、信用の財貨の世界に及ぼす作用に關し、ハーンの思想の概要を述べたるものにして、彼は之を以て、信用の、資本財又は資本に及ぼす作用を述べたるものとしてゐる。<sup>22)</sup>蓋し前述の如く、彼は資本を以て一般財貨の一部分となし、財貨の増加は同時に資本増加を意味すると考へ居るが故である。

更に彼の主張にとりて重要なものは、信用増加は、財貨の増加従つて資本の増加を招來し得るも、それは、信用増加が直ちに生産増加を齎らす故には非ずして、信用許與の結果、需要の變化を來し、更に之が分配の變化を齎らす事によりて、資本増加を惹起するものなり、と言ふ點である。此の事は、彼の著書の第二版に於ても觸れられたる所であるが、<sup>23)</sup>第三版に於ては、一層明瞭に次の如く言ひ表はされてゐる。即ち、「資本の形成は財貨生産 Güterproduktion の問題には非ずして、分配の問題であり、財貨配當 Güterverteilung の問題であり、而も、各時期間 intertemporal 並びに各人間 interpersonal に於ける財貨配當の問題である。」<sup>24)</sup>と。

然し乍ら、茲に所謂各時期間並びに各人間に於ける財貨の配當とは、如何なる事を意味し、又信用授與及び資本形成と如何に關係するか。彼の述ぶる所を總括すれば次の如く言ひ得るであらう。

20) a. a. O. 2 Aufl. SS. 137-138, 3 Aufl. S. 124

21) a. a. O.

22) a. a. O. 2 Aufl. S. 141

23) a. a. O. S. 137. 但し此の場合の分配變化は財貨の生産増加を齎らす原因として述べられたものにして、2 Aufl. S. 124 に於ても同様の事が述べられてゐる。

即ち今、前述の靴製造の例を再び持ち来る。此の場合、第一年に於て製靴機械を製作し、第二年に於て靴を生産し得るは、全く信用授與の爲にして、信用授與が生産迂路の必須要件たるは、今更説明を要しない。而して斯かる生産迂路による生産は、社會的生産物の消費を、一定期間——例へば一年間——延期する事によりて、（第二年には）その生産物を増加するものである（資本たる製靴機械と、並びに之によりて生産さるる靴）。即ち社會的生産物の消費が、一定期間延期される事が、各時期間に於ける財貨配當の變化にして、之が資本財増加の原因たるは明かである。<sup>24)</sup>更に亦、斯かる生産迂路による生産が行はるる場合には、現在財の配當にも變化を伴ふものにして、例へば、石炭を煖爐に於て燃燒せんとせし消費者は、其の消費を制限せられ、此の石炭は、企業者によりて生産的に消費される事となるのである。之即ち、各人間に於ける財貨配當の變化にして、資本増加の原因たるは言ふを俟たない。<sup>25)</sup>

要するにハーンは、已に前述の如く、信用授與と財貨生産との間に存する因果の矛盾を脱れん爲に、右の如き配當の變化を持來り、以て、信用授與による財貨配當の變化が、國民經濟に於ける、資本形成の原因なる事を主張してゐるのである。

### 三、資本形成の基礎を節約に求むるもの（通説）

信用理論に關するハーンの著一度出づるや、之に對する批評論難陸續として現はれ、爾後に現はれたる貨幣信用の著書にして、彼の説を論ぜざるもの殆んど無きの有様である。<sup>27)</sup>

24) a. a. O. 3 Aufl. S. 130

25) a. a. O. S. 131.

26) a. a. O.

27) 此の事は彼の著書第三版の序言に於て G. Haberler の言を引用してゐる。

28) A. Lampe: Zur Theorie des Sparprozesses und der Kreditschöpfung SS. 150-

殊に、信用と資本との關係は最も重要な所にして、或者は、彼の推論の過程に於ける論理的誤謬を指摘し、或は、其の觀察の一面的なるを難じ、更に其の議論の前提を誤れりとしてゐる。<sup>29)</sup>

例へば、ハーンが、「生産は需要を前提とする。今需要が生産に對して第一次的なりとすれば、信用許與も亦資本形成に對して第一次的である。」と云ふ推論の過程を採れるに對して、次の如き異論が生ずる。即ち、右の命題の第一段にある需要は、時間的に見て、生産終了後に生ず可きものなるに、第二段に於ける需要は、完成せる資本財に對する需要には非ずして、原料並びに勞動力に對する需要を意味し、時間的に見て生産に先立つものである。故にハーンの推論は、論理的誤謬を犯せるものである。<sup>32)</sup> 又後に述ぶるが如く、節約を以て資本形成の基礎と見る論者の間には、ハーンが、節約者の自由意志による節約を無視せるを難じ、利子引下による信用擴張に際しては、節約者の節約慾が減退し、寧ろ浪費を奨励するが如き事ともなり得る、と非難するものがある。<sup>31)</sup> 更に又、ハーンが、財貨の増加と資本の増加とを同様に取扱へるを攻撃して、要するに信用は資本形成の根源ではない。それは只企業者勞働者をして、より盛に働かしむるのみにして、その結果生産物を増加するであらうが、それが直ちに資本増加ではあり得ない。それが資本増加となるや否やを決するものは、信用とは關係なき、その生産物の經濟的利用性 Wirtschaftliche Verwertbarkeit <sup>34)</sup> である。」と論ずる者もある。

以上の他、ハーンに對する批評は實に多種多様にして、到底之を枚舉するを得ざる故、以下、彼の反對論者に共通なる、而も問題の最も重要な點のみを述ぶる事とする。

151 K. Diehl: a. a. O. S. 129. 131. H. Mannstaedt: Ein Kritischer Beitrag zur Theorie des Bankkredites. SS. 20-21 S. 29. A. Weber: Depositenbanken und Spekulationsbanken. S. 165

29) Mannstaedt: a. a. O. S. 27. Weber: a. a. O. S. 163

30) Mannstaedt: a. a. O. SS. 19-25. S. 30 Lampe: a. a. O. S. 132 Weber: a. a. O. S. 164. Diehl: a. a. O.

然らばその根本問題は何處に存するか。即ち、資本形成の根本條件は節約にして、銀行の創造にかゝる信用授與は、決して之が代りとなり得ない、と言ふ點である。

而も此の主張を、ハーン説との關聯に於て、最も興味深く展開せるは、マンシュタット<sup>35)</sup>なる故、以下主として彼の述ぶる所を窺はう。

先づ最初に述ぶ可きは、彼は、最も簡單なる場合の説明から始めん爲に、カツセルの所謂「進歩の一樣な經濟」<sup>31)</sup>を議論の根底に置ける事である。而して、此の場合に於ける進歩の一般的なる原因は、人口の増加<sup>32)</sup>なる故、先づ第一に人口の増加のみを假定し、<sup>33)</sup>次で之に生産技術の進歩を配し、<sup>34)</sup>兩者の場合に於て、共に實物資本の増加は、信用擴張の結果に非ずして、寧ろ所得の使途如何、即ち節約に依存するものなる事を述べてゐる。而も更に、此の積極的主張を證明せんが爲め、再び假設を變へて、信用が實物資本の増加を齎らし得るものと假定し、<sup>10)</sup>資本増加を決定する最後のものは、節約なる事を證してゐるのである。

今假に、一年間に人口が一割だけ増加したと假定する。此の場合、國民の生活程度を變へざる爲めには、消費財の一割だけ増加するを必要とするも、此の消費財の増加は、單に勞働人口一割の増加によつてのみ爲し得られるであらうか。假に人口が増加せず、従つて消費財の年産額を前年同様ならしむとするも、此の部門に於ける實物資本は、其の滅失の程度だけ補充されるを要するのである。故に今、年々人口の増加する社會に於ては、之に應じて實物資本の増加するを必要とするものにして、而もかかる實物資本は次の三者より成るを普通とする。即ち(一)新らしく増加

31) 前述の所

32) Lampe: a. a. O. SS. 150-151, Mannstaedt. a. a. O. S. 20.

33) Weber: a. a. O. S. 165.

34) Diehl: a. a. O. SS. 129-130

35) Mannstaedt: a. a. O. SS. 17-31.

す可き實物資本の生産に用ひられるもの、(二)其時々<sup>40)</sup>の一定範圍に於て、實物資本を維持する爲に用ひられるもの、及び(三)消費財の生産の爲に供給されるもの、より成るものにして、三者間の割合も亦一定するを要するのである。<sup>42)</sup>

今進歩の一樣なる經濟に於て、右の如き實物資本の存在を必要とするならば、カッセルの次の言は、亦至當なりと言はねばならない。即ち、「我々の進歩的な經濟に於ては、常に、その時々<sup>41)</sup>に於ける欲望充足に必要なよりも、一層多くの生産手段が存してゐる。故に我々は、常に、事實上使用したる生産手段を用ひて、一層潤澤に、現在の欲望を充足する事が出来るものと考へてよい。……夫故に、絶えず實物資本を増加する目的に、生産手段の一定部分を使用する事は、然らざれば可能なる欲望充足が、制限を受けるものにして、……一の犠牲を意味する。斯の如く、實物資本の増加の爲に、欲望充足を制限する事は、之を節約と稱し、節約による實物資本の増加は、之を具體的な意味に於ける、資本の形成と稱する。」と。

而して、此の進歩の一樣なる經濟が、貨幣經濟又は信用經濟なる場合に於ては、各人の欲望充足手段は、一應その所得として現はれる故、節約は即ち、所得を費消せざる事と解せられる。<sup>43)</sup>故に、斯かる社會がその進歩を繼續する爲には、従つて、必要な實物資本の増加の爲には、人口の増加に比例したる所得の増加が必要なるのみならず、その所得の中、消費さるる部分も節約される部分も、共に同比率を以て増加するを要するのである。<sup>45)</sup>

然らば、斯かる所得の増加は如何にして招致せられるか。マ氏も亦、それが銀行の信用創造に

36) G. Cassel: Theoretische Sozialökonomie S. 27 „Die gleichmässig fortschreitende Wirtschaft.“

37) a. a. O. S. 28

38) Mannstaedt: a. a. O. SS. 19-21

39) a. a. O. SS. 21-22

40) a. a. O. SS. 23-25

41) c. f. Cassel: a. a. O. S. 29.

42) Mannstaedt: a. a. O. SS. 18-19

43) Cassel: a. a. O. SS. 29-30

44) Mannstaedt: a. a. O. S. 19.

45) a. a. O. S. 21

基く支拂手段の増加によるを認むれど、<sup>46)</sup>而も尙、信用創造そのものが、直ちに所得の使途を支配し得るとは考へ得ないのである。<sup>47)</sup>否寧ろ、假令信用創造は行はれずとも、必要なる實物資本は依然生産されるものにして、單に物價の下落を伴ふに過ぎず、と考へてゐる。

以上は單に、人口増加のみを假定したる場合なれど、實は之と共に、生産技術も亦進歩するものにして、此の場合に於ては次の如く述べられてゐる。

即ち、人口の増加に應じて増加されたる實物資本特に新固定資本は、技術の進歩の爲めに、著しくその給付能力を増大する。<sup>48)</sup>故に此の場合に於ては、信用擴張が、人口増加の程度に及ばずと雖も、尙物價の下落を生ずるのみにして、若し人口増加の度に應ずる時は、明らかに所得の増加が認めらる。而も其の何れの場合を問はず、實物資本増加の原因は、信用擴張に依るものならずして、所得の使途如何即ち節約によるものなりと。<sup>49)</sup>

斯くて、マ氏の積極的主張はその概要が示されたれど、尙彼は、信用擴張が實物資本を増加せしむとの假定の下に、自己の主張を吟味して居る。以下その大要を述べるであらう。

今、此の假定の下に於ては、使用せられざる生産手段は何一つとして存在しない。故に若し、實物資本の増加従つて財貨のより豊富な供給が望まるるならば、現存の生産手段をば極度に利用せざる限り、生産過程が一部分轉換されねばならない。即ち、勞賃を高め、原料機械に高價を拂つて、之等を消費財の生産部門より誘致するを要する。然るに此の場合に於て、勞働並びに原料の轉換は比較的容易なるも、機械に至りては其の用途概ね固定し、假令生産の轉換が行はるとす

46) a. a. O. S. 20  
47) a. a. O. S. 21  
48) a. a. O.  
49) a. a. O.  
50) a. a. O. S. 22

るも、それは長き時期を経、又一定の條件の下に於てのみ、初めて行はれ得るのである。<sup>51)</sup>

更に資本財生産の爲めに消費財の生産は減少せられる。又新創造の購買力を以て、消費財の生産部門より生産手段を誘致し得たりとするも、その結果、賃銀は騰貴し、企業利潤は増大し、同時に生産手段の所有者の所得も増大する。然るに之等の人々の餘剩購買力は如何に使用せられるか。更に又此の場合、本來此の生産手段を購ひ勞賃を支拂はんと欲せし人々の手に存する購買力は、今や如何に使用さる可きか。最後に又、本來消費財を購はんと欲せし人々は、その所得が不變なるにも拘はらず、其の價格騰貴により、需要制限を餘儀なくされる。斯くて、消費財生産者の餘剩利潤は如何に用ひられるか。

最初に、望まれたる生産過程の轉向が、果して成功するや否やは、實に之等の餘剩購買力の使途如何によるものにして、之が消費財の需要に向へば、所期の目的を達せずして物價騰貴を招來し、反之、生産的に用ひられるか或は節約されるならば、生産過程の轉向を経て、財貨の増加従つて資本の増加を齎らすのである。<sup>52)</sup>

即ちマ氏は、何れの場合に於ても、信用授與が實物資本形成の一要件たるは之を認むれど、それが最後の決定要素たり得ざる事を主張し、節約を以て、實物資本形成の根本條件なりとなし居るのである。

#### 四、結 言

51) a. a. O. S. 23

52) a. a. O. S. 24



以上を以て私は、信用と資本との關係に關し、近代に於て相反する二つの主張を、各々その代表者によりて述べ來つたのである。

即ち其の一は、信用を以て資本形成に對して第一次的なりとなすものにして、議論の根據を、近代經濟の彈力性、即ち驚く可き生産技術の進歩と勞働力の豊富性に求め、之あるによりて信用擴張が、資本増加を齎らすものなりと斷するのである。然るに他のものは、資本の生産要素として、勞働力以外の生産手段に重きを置き、それが資本生産に用ひ得らるるは、全く過去の節約に依るとの考より、資本形成の根本條件を節約に求め、以て、信用の資本創造力を否定せんとするのである。

然らば、前者に於ては全然過去に於ける勞働の結果を無用なりとし、後者に於ては全然信用授與の不必要を主張するか、我々は決してそうは言ひ得ないのである。

即ちハーンによれば、信用擴張によりて、例へば工場に對する需要が増加すれば、直ちに工場が建設されるも、その工場建設期間中に於ける、勞働者の爲の生活資料並びに必要な機械は、之を過去の生産に俟たねばならぬのである。<sup>53)</sup>又マンシュタットによるも、信用擴張の結果、資本財生産に必要な勞働力原料及び機械の類は、之を消費材生産部門より轉向せしめられ得べきを認めてゐる。<sup>54)</sup>只前者に於ては、斯かる過去の生産物——而も近代經濟に於ては通常存在する所の——をして、資本生産に役立たしむるものが、信用なるを強調するに反し、後者に於ては、右の如くしてなされたる生産過程の轉向が、成功するや否やは、其の結果生ずる所の社會の餘剩購買力

53) Hahn: a. a. O. 2 Aufl. S. 142.

54) Mannstaedt: a. a. O. S. 23

が、如何に使用せられるかに依存するものなる事を、主張するに過ぎぬのである。

故に問題は、社會的所得の使途、即ちその中消費的に用ひられるものと、生産的又は節約に用ひられるものとの割合が、信用作用によりて、支配され得るや否やに存するものと言はねばならない。

斯くて、右の見地より兩説を比較する時は、假令、個々の點に於て不備缺點を指摘し得るとするも、猶ハーンの説に優越を認めざるを得ないと考へる。蓋し、信用擴張の結果、社會の分配關係に變化を齎らし、定額收入者の實所得を減少せしめたるは、明かに一の強制的節約にして、之によりて、より多數の人間が生産的勞働に従事する事となり、財貨の生産増加、従つて資本の増加も齎され得るであらう。

只今日の銀行が、低き利子にて無限に信用擴張をなし得可きものなりや否や、が一の問題であり、同時に、利子生活者及び其の他の定額收入者の犠牲に於て、生産擴張従つて資本増加をなす事が、果して國民經濟全體にとりて有利なりや否やは、自ら別個の問題である。